

二〇〇九年度 東北大学前期試験 国語解答・解説及び配点予想

※ここでは国語を100点満点で考えています。学部学科によって満点が異なることも考えられますが、配点のポイントは共通であると考えられます。

一【現代文】

【解答例】

問一 1 同僚 2 修復 3 頻繁 4 構 5 許容

問二 食物が霊長類には争いのものでしかないという意味。(二十四字)

問三 劣位者は食物を要求することを通して優位者と親和的關係を築こうと意図し、優位者は食物を与えることで劣位者を操作しようとする。(六十字)

問四 類人猿では優位者が、所有する食物を特定の個体に配分し、相手を操作して共存するが、人間は個人の所有を否定し、食物を平等に配分することで宥和的關係を築いて共存する。(八十字)

問五 人間の、食物を通した共存の方法は、幼時には身についておらず、経験を通して身につくものだという意味。(四十九字)

【配点予想】

問一 1点×5 解答通り

問二 5点 ポイント以下の通り

- a 食物が 2点
- b 霊長類(他の動物)にとって 1点
- c 争いのもとになる・優劣の關係をつくり出す 2点

問三 6点 ポイント以下の通り

- a 劣位者が食物を要求する意図は優位者との親和的關係の構築 3点
- b 優位者が食物を分配する意図は劣位者を操作すること 3点

問四 8点 ポイント以下の通り

- a 類人猿では優位者が食物を所有 2点
- b aを分配する事で縦の關係で共存 2点
- c 人間では食物の個人所有を否定 2点
- d cを平等に分配して横の關係で共存 2点

問五 6点 ポイント以下の通り

- a 人間は食物を通して他の個体と共存 2点
- b aは先天的なものではない 1点
- c aは社会的な經驗を通して身につく 3点

※誤字・脱字、句読点等のミスや、文末の処理のミスは、それぞれ1点減点。(以下同じ)

【解説(総合)】

近年の東北大学の1問目は、比較的抽象度の高い論説文を題材にして、部分的な論旨と全体の主旨をバランスよく問うものが続いていたが、本年度はやや具体的な文章であり、しかも設問の指定が例年よりも親切なものが多く、やや難易度は低下したといえる。

本文は食物を通した類人猿と人間の社会構造の違いを述べたものだが、一つ一つの設問に丁寧に答えていけば、全体の論旨も整理しやすい。

【解説(設問「と」)】

問一 漢字の書き取り。標準的なものである。

問二 「物騒な代物」について問う問題だが、直前に指示語があるので前の段落を整理すればよいとわかる。

問三 類人猿における食物による社会支配の形態を整理させる問題。「劣位者」と「優位者」の意図を書け、という指定を意識すれば、次の段落を整理すればよいことがわかる。ここで類人猿の社会形態が出れば、問四が解きやすい。

問四 類人猿と人間の共存の形態の違いを「対比的に」説明する問題。問三で類人猿のケースが出ているので、それに項目をそろえて「対比的に」考えることで人間のケースも出せる。

問五 人間の「社会的な食事」が「生得的でない」という表現の意味を説明する問題。「生得的でない」というのだから後天的なのであり、それを考えれば本文末尾が答えだとわかる。

二【現代文】

【解答例】

問一 1 きづか 2 たいだ 3 あやつ 4 とうすい

問二 a 自殺するのにちょうど良い時を待っているということ。

b 笑い飛ばして相手にしないこと。

c 食欲しか持たない存在。

問三 生まれて初めて自分で野ゴイを釣ったこと。(二十字)

問四 自殺したり家族を見限ったりは絶対にしないので、釣りに没入させてほしいという気持。(四十字)

問五 「かれら」は何事にも仲間を必要とし、自己への没入の充足感を一生知らないかもしれないが、「私」は野ゴイ釣りと出会ったことにより、その喜びを知っているという理解。(七十九字)

【配点予想】

問一 1点×4 解答通り

問二 2点×3 ニュアンスが出ていれば可。

問三 4点 方向が出ていれば可。

問四 6点 ポイント以下の通り

a 自殺したり、家族を見捨てたりするつもりはない 3点

b (aなので)釣りに専念させてもらいたい。 3点

問五 10点 ポイント以下の通り

- a 若者たちは何事も仲間を必要としている 2点
- b (aのため)孤独の楽しみ・自己への没入の充足を知らない・混乱から抜け出せないで終わってしまう 3点
- c 「私」は野ゴイ釣りに出会った 2点
- d (cのおかげで)自己に没入する喜びを知った 3点

【解説(総合)】

近年の東北大学の二問目は、比較的読み取りやすい小説を題材にして、傍線近くの文脈や語句の意味、全体の構造などをバランスよく問う問題が続いている。本年度の問題は、例年以上に設問の設定が明確で、解答がたてやすい問題といえる。

【解説(設問「と」)】

問一 漢字の読み。標準的なものである。

問二 語句の意味。これもしばしば出題される。aの「寂滅」は、仏教用語で死ぬこと。(問四のヒントか?)

問三 「私」が「新しい段階」に入ったことのきっかけを問う問題。漢字「怠惰」の直後に「あの日を境にして、私は変った」とあり、この前が答え。こうした単純な問題があとの設問のヒントになることが多い。

問四 「私にかまうことはない」という時の「私」の心情を問う問題。前後に着目すればよいが、問三の「新しい段階」における心理なのだから、「釣りに没入したい」ということになるであろう。

問五 湖の岸辺で騒ぐ若者たちと「私」の違いについて問う問題。ここまでの問から、「私」が「野ゴイ釣り」との出会いを通して「私にかまうことはない」という心境に達していることは明らかであり、これと対比させることで、答案全体もバランスよく記述することができる。

三【古文】

【解答例】

問一 (1) 煙 (2) じ

問二 女三宮の物思いに沈みやつれる様子が本人を前にしなくとも想像できたから。(三十五字)

問三 一方では、とても不快で気味悪く思うが、ああ、他方では、こらえることができず、小侍従もひどく泣く。(五十字)

問四 女三宮の、柏木に死に後れず自分も後を追って死のうとする覚悟。(三十字)

問五 どんな前世の因縁で、女三宮との許されぬ密会を重ねることに強く執着したのだろうか。(四十字)

【配点予想】(二十点)

問一 各一点

問二 四点

- ・「女三宮」の様子であること ……一点
- ・「うちしめり、面瘦せたまへらむ」様子が書かれていること ……一点
- ・面影が心に浮かんできたこと ……二点

問三 五点

- ・「かつは・また」 ……一点
- ・「え忍ばず」 ……一点
- ・「いとうたて恐ろしう思へど」 ……一点

・「この人」が小侍従であること ……二点

問四 四点

・「女三宮」の気持ちであること ……二点

・柏木の死に後れまいとする気持ちであること ……二点

問五 五点

・「いかなる」 ……一点

・「昔の契り」 ……一点

・「かかること」の内容 ……二点

・「心にしみけむ」 ……一点

【解説】

問一 (1) この歌が注にある柏木の歌の返歌になっていることと、二行後の柏木の言葉がヒント。

(2) 詠み手の意志が含まれていると考える。

問二 直前の「已然形十ば」の表現に着目する。

問三 尊敬語がないことから「この人」を同定する。

問四 「後る」の意味、「やは」が反語であることをとらえる。

問五 リード文を参考にし、過去推量「けむ」から過去の話であることをとらえ、「かかること」の内容を考える。

【現代語訳】

それほどひどい過ちを犯したというわけでもないのに、目をお合せしたあの夕べから、そのまま心が乱れ、うわの空に迷いはじめた魂が、そのままと

の体に還らなくなってしまうのですが、もしもそれがあの院のお邸内にさまよっているのだったら、下前の褌を結んでお引きとどめください」などと、いかにも弱々しく、脱け殻のような様子をして泣きつ笑いつお話しになる。

小侍従は、女官もただ何かにつけて後ろめたく気兼ねしていらつしやるご様子を語る。柏木は、もの思いに沈んで面やつれしていらつしやるだろうと思われる宮のご様子が目のあたりに拝見されるような気持ちになり、いかにもこの身からさまよい出た魂が宮のもとに行き来するのだろうかなど、いよいよ心地が苦しく乱れてくるので、「もう今となっては、宮の御事は、いっさい何も申しあげることはずまい。わたしの一生はこんなふうにはかなく過ぎてしまったが、この思いが未来永劫成仏の妨げになるかもしれないと思うと、まったくせつないのです。気がかりなあのお産のことを、せめて、ご無事におすませになったただけは、なんとかしてお聞きしておきたい。あのとき見た夢を、この胸ひとつに思いあたっていながら、ほかの誰にも打ち明ける人のいないのが、ひどく胸のふさがる思いなのです」などと、さまざま深く思いつめていらつしやる様子を、一方ではたいそう不快で気味悪く思うけれども、ああ、他方ではこらえきれなくて、この小侍従もひどく泣く。

柏木が紙燭をお取り寄せになって宮のご返事をごらんになると、御筆跡もいまだにまことに頼りない感じだが、きれいにお書きになって、「おいたわしく存じていますが、どうお見舞いできません。ただお察しするばかりで……。お歌に『思ひのなほや残らむ』とおつしやるにつけても、

立ちそひて消えやしなましようきを思ひみだるる煙くらべに

(あなたの煙といっしょに私も消えてしまいたいくらいです。この情けない私の物思いの火に乱れる煙は、あなたのとどちらが激しいかを比べるためにも)

あなたにおくれをとるようなことがありますか」とだけあるのを、柏木はしみじみと悲しく、またもつたいたいことと思う。

「いやもう、この『煙くらべに』とお言葉こそ、わたしのこの世に生きた思い出というものであろう。思えばはかないご縁ではあった」と、いっそう激しくお泣きになって、宮へのご返事を、横になったまま筆を休め休めお書きになる。言葉もとぎれとぎれに、筆跡もおかしな鳥の足跡のような有様で、

「行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れし

(行く方も知れない大空の煙となつてしまつても、この私の魂は恋しく思うあなたのおそばを立ち離れることはありません)

夕暮にはとりわけ、私が煙となつてのぼつた空を眺めなさってください。お見咎めになるお方のことも、私の亡き後はご心配にならないで、かいのないことですが、せめて憐れみだけはおかけくださいまし」などと乱れ書きに書き散らしているうちに、ますます気分がわるくなつてきたので、「ではもうよい。あまり夜も更けないうちにお帰りになって、このようにわたしが臨終も迫っている様子だった、と宮に申しあげてください。今になって、人があれこれ思い合せて不審がりもしようと、死んだ後のことまで案じられるとは情けないことです。どういう前世の因縁で、このようなことに深く執着してしまつたのだろうか」と、泣く泣くいざり入つてしまわれたので、ふだんはいつまでも前にすわらせて、たわいもないむだ話までもさせたがっていらつしやるのに、今日はなんと言葉少ななと思うと、小侍従はおいたわしくて、すぐには立ち去る気にもなれない。

四【漢文】

【解答例】

問一 a いずれか b なし

問二 1 ゆえにくい(くゆる)あることすくなし。

2 いわんやそのまことに(しんに)ゆうするものをや。

問三 長いこと借りて返さなければ、どうして自分の物ではないと気づくだろうか。

問四 駄馬に乗る時は慎重でも、駿馬に乗るとついいい気分になるから。(三十字)

問五 自分の権力や勢力は、本来人から借りただけの物なのに、自分の物だと思い込んで、考えようともしないこと。(五十字)

【配点予想】(二十点)

問一 各一点 解答通り。

問二 各二点 解答通り。

問三 四点 ポイント以下の通り。

a 長いこと借りて返さなければ(仮定形) ……二点

b どうして自分の物ではないと気づく(知る・意識する)だろうか(反語形) ……二点

問四 四点 ポイント以下の通り。

a 駄馬に乗る時は気をつける ……二点

b 駿馬に乗るとつい意気揚々となる ……二点

※ aのみでは不可。

問五 六点 ポイント以下の通り。

- | | | |
|---|-----------------------------|------|
| a | 自分の権力や勢力が | ……一点 |
| b | 人からの借り物である | ……二点 |
| c | 自分の物だと思いつむ | ……二点 |
| d | (以上のことを)自分で気づかない・考えない・反省しない | ……一点 |

【解説(総合)】

東北大学の漢文は、標準的な難易度の議論の文章から、基本的な語句、構文、さらに全体の内容の整理がバランスよく出題されることが多い。そうした意味で本年度の問題も、例年の傾向にそった良問といえるだろう。ただし、基本的な構文が多いだけに、それらをしっかりと押さえておかないと、前半と後半の論旨のつながりが把握できず、思わぬ不覚をとることもあり得る。

【解説(設問1と)】

問一 語句の読み。

- a 基本的な疑問詞。「たれか」と読めば「誰が」の意味になり、この文脈には適さない。
- b ごく基本的な否定の字。ちなみにこの部分は、「終莫省之」の倒置形(強調表現)。

問二 構文の書き下し

- 1 「鮮」を「すくなし」と読むケースは、〇七年度にも出題されている。
- 2 抑揚構文の後半。これも過去に出題例あり。

問三 現代語訳

前半が後半の条件なので、仮定形で訳す。後半「悪」は「いづくんぞ」でこの場合は反語。

問四 内容説明

直前の文脈を整理すればよい。問二の1の部分で「駄馬に乗ると失敗が少ない」と言っていることとの比較になっているので、この要素を加味するとよいだろう。

問五 主題把握

作者の主張を整理する問題だが、傍線の直前の文脈を整理し、なおかつ問四の内容を加えれば解答が出る(古人の言葉の引用は本文の主題)。

【現代語訳】

私の家は貧しいので馬がない。時に借りて乗った場合に、足がのろくやせた馬を得たならば、急ぎの用事であっても、強いてむちを当てるようなことはせず、恐れ慎んで、まるでつまづきそうな様子で乗り、(道の)溝やくぼみに出会ったならば、すぐに馬から下りる。だから後悔するようなことも少ない。ひずめも耳も立派で早い馬を借りたときは、意気揚々として思い通りに乗り、むちを当て、たづなをゆるめ、山や谷を見ても平気なのは、大変に気分がいいものである。しかしながら(こういうときには)落馬する危険があることも仕方がないことである。

ああ、人の気持ち(状況によって)変化するのは、ひとえにこんなことによるのだろうか。物を借りて急な用事に備える時でさえ、このようなものである。ましてや(借り物でなく)本当に自分の物ならば、なおさら(持ち物によって、心が変わる)であろう。

しかしながら、人の持っている物で、どれが借り物でないとすることができようか。君主は権力を人民に借りて尊ばれ富んでいるのであり、大臣は権勢を主君に借りて、寵愛され尊敬されるのである。息子と父親、妻と夫、奴隸と主人なども、(権力や権勢を)相手に借りていることは、深くしかも多いのである。皆(相手から借りた物を)自分の物だと思って、しかもついに省みることもしないのである。どうしてこれが惑いでないといえようか。

もしあるいは、ほんのちよつとの間でも、借りた物を相手に返したならば、大国の主は独身の平民となり、大名の家柄といっても、一人の奴隸となってしまう。まして身分の低い者はなおさらであろう。孟子がいうには、「長く借りて返さないでいけば、どうしてそれが自分の物でないと気づくだろうか」と。私はこういふことから深く感ずるところがあり、そこで馬を借りた話をして、自分の意見を広めようとするのである。